

島田眞一先生 ご退職に寄せて

会計ファイナンス研究科教授 吉 田 寛

島田眞一先生は、平成24年3月末に定年を迎えられ教授を退職された。現在は、客員教授として教鞭をとっておられ、また千葉商科大学名誉教授となられた。足が速く、身のこなしの軽い先生が、定年を迎えるお年だったのは、私にはいささかの驚きであった。

先生は昭和17年1月2日に広島県三原市でお生まれになる。その日の朝日新聞は、「マニラの運命全く決す」の見出しでマニラ市街の陥落が近いと報じ、さらに前年12月8日の真珠湾攻撃の成果の詳報が掲載されていた。

島田先生は、昭和38年に国家公務員上級職甲種に合格される。「鉄腕アトム」のテレビ放送が開始され、東京の街に横断歩道橋ができた年でもある。当時の歩道橋は1千万円、大卒の初任給が2万円のころであった。翌年広島大学を卒業し国税庁に就職される。昭和39年は、東京と大阪を新幹線が2,480円でむすび、東京オリンピックが開催された年として多くの人に記憶される。数字を扱う者には、算盤から解放される年でもあった。大井電気や早川電機（現シャープ）やキヤノンが、重量は15kg、価格は39万円を超える電卓の販売を始めた時期である。

一つゴールを決めると、普通は、そこで一息入れるのだが、島田先生は更に二つゴールを狙っていた。関東信越国税局で国税調査官をされていた昭和43年6月に、日商簿記一級に合格され同じ年に公認会計士第二次試験に合格される。翌昭和44年には、大蔵省証券局企業財務課に転任され、企業会計審議会事務局を担当して企業会計原則の改訂作業にも従事されている。国家公務員上級職甲種は簡単な試験ではないし、公認会計士第二次試験も簡単な試験ではない。

昭和47年には郷里の広島県の吉田税務署で署長をされる。このころには電卓もポケットに入るカシオミニが発売され、価格も12,800円となっている。といってもこの頃は、ご自分で電卓を叩くことはなかったそうだ。

昭和50年になると先生は、日本貿易振興会（JETRO）のアジスアベバ駐在事務所所長としてエチオピアに家族同伴で赴任される。最古の帝国と呼ばれたエチオピ

アは、ソロモンにつながる皇帝ハイレ・セラシエ1世が陸軍のクーデターにより逮捕、拘禁され殺害されるという動乱の時代であり、エチオピアは帝国から、社会主義に舵を切った時代であった。当時のエチオピアには4大商社が事務所を構えていた。ほかにも富士紡績の合弁会社「コットン・カンパニー・オブ・エチオピア」があった。この会社も、国有化される。投資した18億円の資本金が失われたと当時の朝日新聞が報じている。同社の嶋田社長とは、エチオピアでは家族間で懇意なお付き合いをされていたと聞いた。

島田先生は、海外旅行を趣味にされている。奥様と旅行されると聞いている。訪れた国の数は50を超えると話しておられた。治安の悪い国も含まれているのであろう。この時期にエチオピアに駐在された経験が、旅行中のリスク管理に生かされているのであろう。

昭和53年にアジスアベバから帰国され国税庁の仕事に戻られる。その後、福岡国税局間税部長、造幣局東京支局総務課長、国税庁では資産評価企画官、札幌国税局で総務部長を歴任された後、石油公団に出向され資金部長をされる。

石油公団では、民間の石油開発業務に資金を融資する関係から国際的な石油ビジネスという貴重な経験をされる。石油の採れない日本は、探鉱のために鉱区を購入する。先生が資金部長をされている頃は、毎年数百億円以上の金額を探鉱に費やしていた。この金額の70%を石油公団が負担し、残りの30%を民間の石油会社が負担する。成功率の低いことは理解していた。しかし、石油の開発に結びつく試掘が余りにも少ない。税が無駄に使われているのではないか。先生はこのことを疑問に思い、米国に視察出張された。先生が米国の石油産業の中心地であるテキサス州ヒューストンで接したエクソンの石油専門家は、「日本の石油会社の米国駐在員は、探鉱の専門家として知識・経験が不足しており、サラリーマンに近い。米国に赴任し、英語力や石油の専門性のある程度身に付けたと評価していたら、3年間の駐在任期がきたといって帰国してしまう。次の赴任者も同じような状態で3年後に帰国している。こんなことを繰り返しては、我々のように20年以上も世界を舞台に石油鉱区の売買に関与してきた石油プロフェッションは育たない。」と指摘した。

先生にとってこの指摘は、米国に駐在する石油会社の社員に対するものだけではなかった。国税庁の職員としてのご自身に置き換えて聞いていた。公務員が天下っ

て特殊法人や民間企業で余生が送れる時代はやがて終わる。退職後を天下りで送るわけにはいかないと痛感された。

その後、国税庁徴収課長と大阪の国税不服審判所で次席審判官をされ、平成3年に郷里の広島で国税不服審判所長に就任される。このポストを最後に、平成5年に50歳で退職される。この時には、その後の人生を設計されていた。

公務員の定年は60歳。世の中の人々は70歳から80歳まで普通に生きる時代になった。自分の人生についてもリスクを管理しなければならない。管理するというのはリスクを回避するだけではない。リスクにチャレンジしなければならない。自分自身に投資し、専門性を持つことが、長寿社会を生きる人生の担保になる。

島田先生は、公務員退職後、その後の人生を念頭に27年ぶりに受験勉強をされる。特殊法人の理事として天下り昼は働き稼ぎを得る。一方、夜はTACとか大原に通われた。公認会計士第二次試験をもう一度受けなおすように勉強をされた。この頃ようやくご自身で電卓を、しかも左手で叩くようになったそうだ。53歳の平成7年に公認会計士第三次試験に合格される。これが一つ目のゴールとなる。

平成10年には島田公認会計士事務所を開設される。このあいだも、先生は勉強を続けて56歳で米国公認会計士（カルフォルニア州）を取得される。米国公認会計士は二回目の受験でゴールを決めたそうだ。そのゴールを決めてから、さらに一太郎やエクセルを利用できるようにとパソコン教室に通われた。20代の女性に手ほどきを受け、ご自身で、ワードも、エクセルも、パワーポイントも利用される。先生は、専門性を生かした自立した人生を手にした。

特殊法人を退職後、1年間、監査法人で非常勤職員として監査を経験される。当初、クライアントから報酬をもらいながら、監査人がクライアントである企業に対して批判的な業務をおこなうことができるのか、不信があったそうだ。しかし、1年間、監査法人で非常勤職員として監査業務を経験する中で、公権力を背景にした役人による検査ではない、民間の職業専門家である公認会計士監査の意義が理解できたという。監査は税務よりおもしろいと思われるようになったのは、このころだそうだ。

平成12年になると日本公認会計士協会リサーチ・センターの調査企画局長を担当される。平成13（2001）年、国際会計基準審議会（IASB）が国際財務報告基準

(IFRS) を公表し、平成17年(2005年)にEUがIFRSを導入する。当時、わが国上場会社が抱える連結子会社を含むと、約8万社がIFRSに対応しなければならないと、多くの上場企業や監査法人が右往左往していた。

米国の会計基準に通じていた島田先生は、IFRSが会計基準の国際的な統一の本流にあると判断し、いち早く研究された。日本公認会計士協会の会員にその成果を伝えるのに東奔西走されていた。

千葉商科大学大学院に会計ファイナンス研究科が開設されたのが平成17年。島田先生は、研究科教授として会計基準、ディスクロージャー、IFRSなどの科目を担当された。この時から島田先生とは、図書館4階の研究室を共用することになった。もっとも、先生はあいかわらず日本公認会計士協会主催の研修会の講師として東奔西走されていた。教授会とか入試の時には、市川校舎においでになる。先生の授業は、もっぱら丸の内サテライトでおこなわれた。先生が授業の度に作成される資料は、テーマの時代的背景から書き起こし、テーマの概要、会計処理の比較と、要点を簡潔にまとめてあり、学生には大いに役に立つ。

先生は、本学の教授をされながら平成20年には、日本公認会計士協会の業務本部長兼自主規制本部長に就任される。そのかわりで、多数の論文を発表されている。特に先生が日本公認会計士協会の機関誌「会計ジャーナル」平成18年3月号に掲載された『包括的長期為替予約のヘッジ会計に関する監査上の留意点(リサーチ・センター審理情報 [No19]) に対する訴訟判決について』においては、長期の包括的為替予約が、ヘッジ会計の対象になるか否かにおける訴訟の担当者としての経緯を解説および論証され、その結論は、わが国における公認会計士業界と金融業界に多大な影響を与え、今なお頻発する金融機関と企業との間でのデリバティブを巡る訴訟にも大きな影響を与えていると聞いている。

いつも忙しくされている先生だが、ある時、数人の先生達のあいだで日本人はサカナをよく食べるといった話に興じたことがあった。ポルトガルの首都リスボンでもイワシの塩焼きを食べさせる店が多いという話を先生がされた。

ちょうど私も、コインブラでおこなわれた学会で、リスボンを経由し、くだんのイワシを食べていた。そのころも、リスボンではカラシ色の木造の路面電車が、石畳の細い路地やアスファルト舗装の大通りを走っていた。高低差の大きい街なの

で、どこにでも電停のある路面電車は少ない距離でも移動するのもにも便利であった。

私が入った店は、路面電車の走る路地からチョット入ったところにある。店先に据えた半分に切ったドラム缶でイワシを焼いていた。イワシの油が炭に落ちてモウモウとケムリをだしていた。島田先生のリスボンのイワシの店は、夕方のケムリの向こうの灯りの色も思い起こさせるような話しぶりであった。

先生は、退職後も客員教授として学生を指導されている。50歳代で資格取得を計画され、その自らの専門性を担保として生きるという計画を実現された。仕事をしながら試験勉強をし、あるいは論文を書き、資格の取得を目指す社会人学生に、「始めるのに遅すぎることはない」と語る先生は、よい指導者であり、目標でもある。

島田先生は、また、時間ができたら本を一冊書きたいとおっしゃっていた。IFRSに係わるものなのか、あるいは、これまで旅をされた諸国の漫遊記のようなものか、あるいはその両方なのかもしれないが、拝読の機会が早ければと思う。